

「上代文学会シンポジウム 山上憶良と漢籍・仏典」司会記

山 口 敦 史

二〇一八年度（平成三十年）の「上代文学会 秋季大会シンポジウム」は、二〇一八年十一月十七日（土）に、駒澤大学にて実施された。テーマは「山上憶良と漢籍・仏典」。パネリストは、國學院大學名誉教授の辰巳正明氏、早稲田大学教授の高松寿夫氏、甲南大学教授の廣川晶輝氏であった。シンポジウムの主旨は以下の通り。

『万葉集』第三期の歌人、山上憶良の歌は、表記法や、漢籍に基づいた表現など多様なアプローチで研究されてきた。特に憶良の思想の背景に仏教を置くことは論を俟たない。とはいえ、憶良は官人であり、歌人である。舶来の典籍や思想を、どのように作品に取り込んでいるのか、気鋭の研究者に改めて論じてもらいたい。今考えられる問題点、今後の展望などを考える場としたい。

上代文学会が「山上憶良」でシンポジウムを行うのは、一九八七年（昭和六十二年）に行われて以来、実に三十二年ぶりということである。憶良ほどの重要な歌人が、これまで正面から取り上げられることがなかったことに驚いたことが第一であったが、学界を見渡してみても、憶良を研究の中心にする人材の少なさにも暗然たる思いを持った。

当日は、会場の参加者は熱心に耳を傾けていたと思うし、パネラーも真摯に答えていたと思うが、質問では七夕歌などについての質問が多く、「山上憶良と漢籍・仏典」というテーマに沿った質問が少ないように思えた。中国古典や中国仏教の知見に基づいた質問や意見がもつとあれば、と思ったのは贅言であろうか。

廣川晶輝氏は「山上憶良の天平元年七夕長歌作品について」という題で、巻八の七夕長歌作品についての考察であ

る。考察では憶良の正統的七夕伝説からの「逸脱」のありようと、漢語表現「青波」について、「蒼波」「蒼浪」など類似・近似の語句を挙げ、「漢籍の用例とは異なる日本なりの変容」と性格付ける。七夕伝説は中国の神話・伝説の類として、古代日本において和歌作品として作歌することの意義、また〈正統的〉〈正統性〉の依拠するものをどこに見出すのか、などが気になる点であった。

高松寿夫氏は「従来厭離此穢土」——憶良が基づいた仏教言説——という題で報告を行った。『万葉集』巻第五の冒頭近くの「蓋聞四生起滅方……」から始まる漢文作品に「愛河波浪已先滅。苦海煩惱亦無結。従来厭離此穢土。本願託生彼淨刹」という漢詩（悼亡詩）とも「哀悼詩」とも呼ばれる）がある。これらの漢文作品は作者の明記がないが、憶良作品ではないかと推測されている。ここでの「厭離」「穢土」に高松氏は注目し、かかる「厭離穢土」の表現が正統的な漢訳仏典には用例を見出すことができず、基『説無垢称経疏』、懷感『釈淨土群疑論』などの経疏類、または日本の源信『往生要集』などに見られるだけであると説き、その用例としての特異性を論じた。

私見では、氏の指摘通り同様の現象はほかにも見られ、例えば、「極楽浄土」という語句は、漢訳仏典にはほとんど用例がなく、伝・元暁『遊心安楽道』、法総『釈観無量

寿仏経記』、元照『観無量寿仏経義疏』などの文献³、そして日本では『日本靈異記』上巻第二十二縁や「故石田女王一切経等施入願文」（延暦十七年。『大日本古文書』家わけ第十八、東大寺文書三、東南院文書之三、四一頁）などの用例を見るのみである。そしてさらに、この「極楽浄土」という用語は古代日本人の心を捉え、『往生要集』などの日本の仏書に頻出するようになるのである。このような問題をどのように考えるかは重要なことであろう。朝鮮半島や日本といった東アジアの辺境にその現象があらわれるという問題性から目をそらすべきではないであろう。

辰巳正明氏が提示したものは、一言で言うくと、〈出典論〉の限界と〈主題論〉の可能性ということになるだろう。「山上憶良と漢籍・仏典——「始終之恒数」と「存亡之定期」をめぐって——」と題された報告は、氏の憶良研究の総論とも言うべき内容で、広範にわたる論を展開していた。

辰巳氏によると、〈出典論〉だけでは作品の本質を究明することにはつながらない。なぜなら、先行する作品を引用するだけでは〈模倣〉となってしまうからだという。先行表現から後続の者が吸収するとしたら、語句だけではなく、その時代の思潮や発想などの〈主題〉をくみ取らなくてはならない、ということになる。ここに〈主題論〉の有効性がある、というのが辰巳氏の（私が理解したところ

(5) 主張である。

辰巳氏は、「悲歎俗道仮合即離易去難留詩一首并序」が憶良作品の総決算であると述べ、その中の、「生には必ず死有り。死を若し欲はずは生まれぬに如かず。況むや、縦し始終の恒数を覚えるとも、何ぞ存亡の大功を慮む」こそが憶良全作品の結論であると説く。ここでの「存亡の大功」は解釈に諸説があり、研究者を悩ませてきた問題である。近年では、岩波文庫本『万葉集』が「生が尽きるその日」と解釈し、『南齊書』武帝紀の「始終の大功は、賢聖も免れず、吾行年六十、亦た復た何をか恨みん」を挙げている。⁽⁶⁾

これらに対して辰巳氏は、『敦煌願文集』「亡文」の一節を挙げている。その全文は以下の通りである。⁽⁷⁾

夫無常者、天地之常期、存亡者、始終之大分、仮使迴転日月、誰免溺喪之津、覆海移山、莫能離無常之境、然今此会設齋意者、則有至孝奉為亡考(妣)某七追念之福会也。唯亡靈乃母儀有則、慈訓滿章(彰)、播女軌於六親、柔和規於九族。豈謂逝水淪波、悲泉路照、百靈(齡)何遽、千秋永離。莫不存亡道乖、痛結心府。至孝等無処控告、唯丈(仗)福「門」、延屈聖凡、設齋追福。唯願以斯設齋迴向福分、先用資「熏」亡靈氣(去)識、唯願化生宝殿、遊歷金台。不落三途、無經

八難、捨閻浮之促寿、獲淨土之長年、弃有漏之微軀、証無生之楽果。然後散霑法界、並(普)及有情、頼此善縁、齋成仏果。

これは、小南一郎氏によると、「亡き母親のために行う祭儀の場で読まれる願文」であり、「七七齋」であると言う。ここには「存亡」「始終」など憶良の用いた語句が見える。ただしこれは〈出典〉ではなく、このような言説を生み出した共通の地平に憶良の言説もあった、ということであろう。この願文「亡文」は成立年代は不明、日本に伝来したかどうか不明である。よって憶良がこれを典拠にしたか否かということは、ここでは問題にならない。このような敦煌残存の文書と、憶良の漢文作品との語彙や主題の共通性が問題になるのである。

願文「亡文」では、「無常」と「存亡」が対の概念として表れ、一切万物が流転するありさまも、衆生の生死のありさまも、逃れることのできない定めであると説いている。そのあとに願文は故人としての母の慈愛と福徳を讃え、無事「泉路」をたどって「浄土」に至ることを祈るのである。願文での主題〈亡母の追悼〉が、憶良作品では「悲歎」の主題性を持つ詩序として機能する動機がどこにあるのか、興味のあるところである。また、願文は死者追悼の儀礼の場において、大勢の参列者の前で読み上げるものである。

憶良作品「悲歎俗道仮合即離易去難留詩一首并序」がどのような場を想定して書かれたのか、作品の公開・披露ということについて、憶良はどのような意識を持っていたのか、さらに考えるべき問題があるだろう。それは「沈痾自哀文」「悼亡詩」などにも同様の問題が考えられるだろう。

また、かかる思想性が朝鮮半島・日本・そして敦煌といった〈辺境〉に表れるという点も、見過ごしてはいけない問題だろう。変文・講経文・経疏などといった文献が敦煌に集まった経緯は不明であるが、「王梵志詩集」をも視野に入れた今後の研究が期待されるところである。

あと、憶良と仏教思想の問題についても議論が交わされた。憶良については、その仏教への学識から、僧侶の経験があるのではないかとの説すら出たことがある。これ自体はさしたる根拠はないようであるが、仏教は〈信仰〉を伴うので、憶良の仏教信仰のありか、ということが話題に上ることがある。しかし、シンポジウムやその前の打ち合わせでも話題に出たのは、憶良はあくまで律令官人であり、天皇に忠誠を誓う一介の役人であるということであった。この点は、薬師寺僧である景戒とはまったく異なる。宗教家である景戒にとつては、信仰世界こそが一番大事なものであって、それ以外のものは夾雑物に過ぎなかつた。『日本霊異記』はそのような意識の所産として見るべきであらう。

う。景戒の苦悩は自分の信仰心が足りないことへの忸怩たる思いであつて、憶良の苦悩とはまったく別物であらう。

当日は司会の知識不足や不行き届きのため、十分な議論ができたかという点では、反省している。これをきっかけに山上憶良についての関心がさらに高まることを期待している。

注

- (1) 中西進校注、講談社文庫（一九七八年）。
- (2) 伊藤博『万葉集釈注 三』（集英社、一九九六年）。
- (3) 藤田宏達「浄土の思想」（『浄土三部経の研究』岩波書店、二〇〇七年）。
- (4) 拙稿「極楽浄土」と個人の救済——上巻第二十二「縁」——（『日本霊異記と東アジアの仏教』笠間書院、二〇一三年）。
- (5) 辰巳氏の「主題論」についての考え方は、『万葉集と主題論』に詳しい（『万葉集と中国文学』笠間書院、一九八七年）。なお、憶良の「悼亡詩」について、契沖『万葉代匠記』による「おびただしい語句の典籍による説明」は、語句の考証のための引用であり、「典拠」ではない、という考えが中西進氏にある（「悼亡詩」『山上憶良』河出書房新社、一九七三年）。契沖の研究方法の問題と合わせて、その意味を考えるべきであらう。

- (6) 佐竹昭広ほか校注『万葉集(二)』(岩波文庫、岩波書店、二〇一三年)。なお、同校注者の新日本古典文学大系本(一九九九年)も同じ。
- (7) 黄徴・吴偉編校『敦煌願文集』(岳麓書社、一九九五年)七二三頁。文中の旧漢字は新漢字に改めた。
- (8) 小南一郎「『十王経』の形成と隋唐の民衆信仰」(『東方学報(京都)』第七十四冊、京都大学人文科学研究所紀要第四百十冊、二〇〇二年三月)。
- (9) 辰巳正明『王梵志詩集注釈』(笠間書院、二〇一五年)参照。
- (10) 拙稿「山上憶良と東アジアの仏教―倍俗先生と山沢亡命の民をめぐる―」(『万葉古代学研究年報』第十六号、奈良県立万葉文化館、二〇一八年三月)。